

アンコールにおける宗教美術の変容 —11世紀に見られる王権と尊像の関係性について—

宮崎 晶子

上智大学アジア文化研究所 客員研究所員
(現 茨城キリスト教大学文学部 講師)

緒言

9世紀から15世紀にわたり東南アジア大陸部にあって繁栄したアンコールは、ジャヤヴァルマン7世の治世(1181-1218年)に最大版図を有したことで知られている。同王は、大乘仏教を厚く信仰し、施療院、灌漑施設等を造営した。この時代に製作された美術は、クメール美術の中でバイヨン様式と呼ばれ、観世音菩薩が多数造られたことが知られている。

バイヨン様式の観世音菩薩像のなかで、現在クメール美術でしか確認されていない特徴的な像容をみせる彫像がある。それは、7世紀西北インドで成立した経典『カーランダヴェーハ・スートラ』(Kārandavyūha-sūtra、以下KVS)を出典とすると考えられている彫像である。こ



図1：上半身に坐像を表現する観世音菩薩像¹³⁾

の観世音菩薩像(Avalokiteśvara irradiant)は、上半身に多数の坐像を表現する点を特徴とする(図1)。KVSは「六字真言」(oṃ maṇipadme hūṃ^{*1)})で有名な経典であり、現在ネパール系サンスクリット写本が90本近く確認されている¹⁾。

この観世音菩薩像は、バイヨン様式すなわち12～13世紀の図像として注目された彫像であるが、近年の研究によって10～11世紀のクメール碑文(K.1154)に「六字真言」の頌句が確認された^{*2)}。この碑文の表面には、左右第一手が与願印(varada mudrā)をとる観世音菩薩が表現されている^{*3)}。

本稿では、これらのKVSを出典とする観世音菩薩像に焦点を当て、10～11世紀のクメール碑文における六字真言の出現と観世音菩薩像が確認された地域の社会的背景を中心に考察し、12～13世紀における大乘仏教信仰の隆盛、ジャヤヴァルマン7世時代の観世音菩薩信仰と比較検討することで、アンコールにおける観世音菩薩信仰の変遷について試論を示す。

結果

1. KVSおよびアンコールの観世音菩薩像に関する先行研究

KVSは、7世紀初頭までに西北インドに成立しており²⁾、サンスクリット語のもので、散文で書かれた『カーランダ・ヴェーハ』と韻文で書かれた『グナ・カーランダ・ヴェーハ』がある¹⁾。散文のものには、12世紀(1196年)ネパール写本を使用したサマスラミ校訂本³⁾とギル

*1 oṃ-ma-ni-pad-me-hūṃ (オン・マ・ニ・パド・メー・フーン)の6字から構成される短呪で、観世音菩薩の慈悲を表現した真言である。この真言には様々な意味が込められているが、「私は宝珠の中にある(I in jewel-lotus)」であると訳されている(manipadmeを処格(locative)に訳す)⁸⁾。KVSはこの真言が記された最も初期のテキストであるといえる。

*2 K.1154には年代が記されていないが、表面に表現された観世音菩薩の様式から10世紀のクレアン様式だと考えられており⁷⁾、裏面の碑文に関しても10世紀ごろと考えられている。

*3 インド密教における観想法の集成である『サーダナ・マーラー』には、左右第1手が与願印の姿勢をとる同様の図像が、“Avalokiteśvara Pretasantaripita (Preta Satisfied、満たされた餓鬼)”として記されている¹¹⁾。6臂で左右第一手は与願印の姿勢をとる。

ギット写本(630年ごろ)を使用したメツテ校訂本²⁾などがある*⁴。また、漢訳もされており、『仏説大乘莊嚴寶王經』(天息災訳)として日本でも確認されていて、「観自在(Avalokiteśvara)」の功德により人々が救済される場面を描いた経典である。

KVS研究は、チベットやネパールのものを中心に研究が進められており、東南アジア研究では、史料の不足もあり、ほとんど言及されていないのが現状である。

アンコールのKVSを出典とする観世音菩薩像に関する先行研究は主なもので4つあるが、詳細に関しては筆者の論文を参照されたい⁴⁾。いずれの先行研究も、主に12-13世紀の大乗仏教最盛期に焦点を当てて検討しており、前述したバイヨン様式の上半身に多数の坐像を表現する観世音菩薩像を中心に研究が進められてきたといつてよい。

しかし近年、2007年に出されたウッドワードの論文は、10-11世紀のクメール碑文(K.1154)に刻まれた「六字真言」を中心に、クメール美術における「六字大

明」*⁵の表現に関して試論を展開している⁵⁾。六字真言はKVSにみられる真言であるため、同碑文により10-11世紀のアンコールでKVSが知られていたことが判明した。

同碑文は1993年にプライベートコレクションから寄贈された碑文であり(図2a)、比較的最近になるまで研究対象とならなかった。詳しい出土地や出土状況に関しては明らかかなことは分かっていないが、同碑文に関する論文として、スキリングの論文⁶⁾と、プーの論文⁷⁾がある。

スキリングはこの碑文を紹介するにとどまっているが、プーはこの石碑の碑文を解読し、碑文表面の8臂の観世音菩薩像(図2b)に関しては10-11世紀の「Manipadma」である、としている。同碑文は賛美の言葉から始まり、2行目後半に六字真言“omṃ maṇipadme hūṃ”が確認できる。

ウッドワードは、同碑文の表面に描かれた8臂の観世音菩薩像(図2b)に注目し、裏面に書かれた六字真言



図2 a, b K.1154 碑文⁷⁾

*4 サマスラミ校訂本は、第一部と第二部に分けられ、前者には16章が、後者には8章が収められている。一方、漢訳にはこのような章分けは見られず、全体は、巻第1から巻第4までの4つの分類に区分されている¹²⁾。また、漢訳はサマスラミ校訂本と比べて少なからず相違点を持つが、両者は全体的に概ね同様の内容をもつものとみなして差支えない。

*5 KVSで唱えられた六字真言は、経典内で「シャダークシャリーマハーヴィドヤー(六字大明)」と呼ばれる。一方、『サーダナ・マーラー』には4臂の女神が「六字観音」として登場し、その姿がKVSの六字大明に類似していることから、その関連が指摘されている。

*6 バンテアイ・チュマールはバイヨン様式の大乗仏教寺院であり、カンボジアとタイの国境付近に位置する。西回廊南側には20世紀初頭の調査において、8体の多面多臂の観世音菩薩像のレリーフが確認されている。

との関係から、KVS 第 1 部第 3 章の「指から水を流し、川を出現させた」⁸⁾ という記述をもとにした観世音菩薩像であると示唆している⁵⁾。KVS を出典とする観世音菩薩像の図像は、クメール美術の中では唯一バイヨン様式において、バンテアイ・チュマール^{*6}のレリーフもしくは上半身に多数の坐像をほどこす観世音菩薩像が確認されるのみとされてきたが、六字真言のもっとも初期の記述を残すテキストが KVS である⁸⁾ ということなどを鑑みるに、KVS を出典とするもう 1 つの図像が、10 - 11 世紀に存在したことが指摘できる。

この 8 臂の観世音菩薩は、立像で描かれ、頭は 1 つ、第 2 手から第 4 手までの持物ははっきりしない。左右第 1 手は体に沿って下ろされており、掌を全面に向けて与願印を表現している。この姿勢から、ウッドワードは前述した KVS の場面を描いているとしている。

次に、筆者のカンボジアでの調査で得られた資料をもとに、同地域の仏教信仰がどのようなものであったと言

えるのか、試論を示したい。

2. 10 - 11 世紀における六字真言の出現と観世音菩薩の表現について

ウッドワードの論文で紹介された 10 - 11 世紀の碑文の表面には、前述したように 8 臂の観世音菩薩像が表現されており、左右第 1 手と願印を示している。

筆者が 2008 年 8 月に行なったカンボジア調査によれば、このような姿勢をとるクメール美術の観世音菩薩像はこのほかに 3 点確認でき、フランス極東学院の発掘記録^{*7}、またギメ美術館所蔵作品の調書^{*8}から、その詳細を知ることができる(図 3 - 図 5)。以下、簡単に紹介したい。

最初の彫像は奉献塔と呼ばれる石碑にあり、4 面にそれぞれ神々を表現している(図 3a-c)。A 面は、8 臂の男神の立像で、頭が欠けており、化仏の様子は確認できないが、左右第 1 手は与願印を示している(図 3a)。



図 3a 奉献塔に描かれた神々 ©EFEO、フランス極東学院の発掘記録の写真 (EFEO Phototeque)

写真番号：16078 (所蔵番号は UNESCO-DCA [1] では DCA160 (N135) とされている)



図 3b 奉献塔に描かれた神々 ©UNESCO & EFEO、UNESCO-DCA の写真
写真番号：cl26-229



図 3c 奉献塔に描かれた神々 ©UNESCO & EFEO、UNESCO-DCA の写真
写真番号：cl20a230

* 7 フランス極東学院 (EFEO) の 20 世紀前半の発掘記録に関しては、手書きの日誌 (journal des fouilles) のコピーがシムリアプのフランス極東学院図書室で閲覧でき、また当時の写真もデータベースで検索できる。筆者は 2008 年夏にシムリアプのフランス極東学院図書室で調査を行った。

* 8 ギメ美術館所蔵作品の調書に関しては、2008 年夏の調査の際にフランス極東学院シムリアプ事務所所長のポチエ氏の許可のもと閲覧した。



図4 左右第1手が与願印を示す8臂の男神像 ©UNESCO&EFEO
(所蔵番号は UNESCO-DCA では DCA166 (N203) とされている)。
UNESCO-DCA の写真 写真番号: d0166-98



図 5a



図 5b



図 5c

図5 ギメ国立東洋美術館所蔵のブロンズ像 ©MG、Mobilier Métallique du Musée Guimet の写真
写真番号: BzFiche 0408,0409

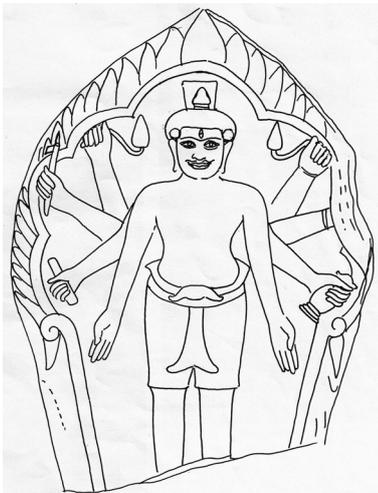


図6 左右第1手与願印を示す彫像
(出土地不明)¹⁴⁾



図 7a



図 7b



図 7c

図7 左右第1手与願印を示す彫像
(トマ・プー出土)¹⁴⁾

もう1つは同じく左右第1手が与願印を示す8臂の男神像が描かれた石碑であり(図4)、裏面は磨かれていて碑文は確認できないが、ウッドワードの示したK.1154碑文と同形であるといえる。

上記の2つの彫像は、ともにプノン・スロック(シムリアブ(シムリアップ)の町から北西に約70km)の地域から出土している。この地域はシムリアブから東北タイへ続く古道が確認されている(地図2参照)。

他には、ギメ国立東洋美術館所蔵のブロンズ像(図5a-c)も同様の姿勢をとることが確認できた。8臂の左右第2手から第4手は手首から先が欠けており、持物や印などは確認できないものの、左右第1手は掌を前

に向けているのが確認でき、髻にはかすかではあるが化仏が確認できる。このブロンズは、クラランという地点から発見されているが、同地はシムリアブからシソボン、チャオプラヤー川方面に行く道(国道6号線)にあり、プノン・スロックからも近い。つまり、隣接する地域から3体の観世音菩薩像が確認されたといえる。

以上の3体が筆者の調査で確認したものだが、他の論文で紹介されている左右第1手与願印を示す彫像は3体あり、出土地不明のもの1体(図6)、トマ・プー出土1体(図7)、プノン・スロック出土1体(図8)となっている。

以上のことから、10-11世紀の大乗仏教信仰、ある

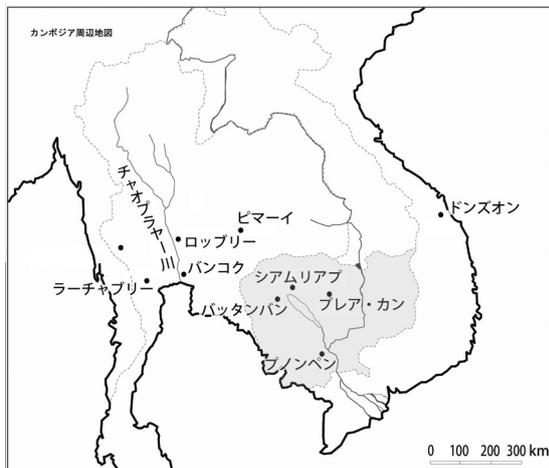


図8a: プノン・スロック出土⁹⁾

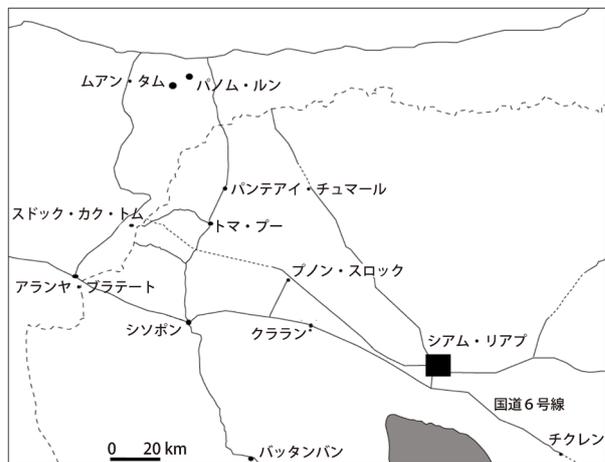


図8b: プノン・スロック出土 ©NMPP

図8 左右第1手与願印を示す彫像



地図1 東南アジア大陸部



地図2 カンボジア北西部

いは KVS 信仰にとって、トマ・プー、プノン・スロックとクラランが重要な地域だったと考えられる。

考 察

10 - 11 世紀と 12 - 13 世紀の表現の違いについて

前述したように、10 - 11 世紀の KVS を出典とすると考えられる観世音菩薩像は、1 面 8 臂で表現され、左右第 1 手は下に伸ばし、与願印を示している。このことから KVS 第 1 部第 3 章にみられる「指先から水を出し、川になり餓鬼の喉と飢餓を満たした」という表現を表わしたものとされる⁵⁾。

一方、12 - 13 世紀の KVS を出典とする観世音菩薩像やレリーフは、第 1 部第 4 章の「ヴィシュヌやブラフマーなどヒンドゥーの諸神を出現する」という箇所と、第 2 部第 2 章「毛穴から天人を放射する」という箇所が表現されており⁹⁾、時代によって好んで表現される KVS の個所が異なるということが指摘できる。

そこで、10 - 11 世紀と 12 - 13 世紀の社会的背景に関して述べたい。

貯水池に関しては、スドック・カク・トム碑文 (K.235、1052 年)^{*9}に記載されている¹⁰⁾。同碑文作成者のサダーシヴァの親族による事業に関して 77-89 節に記されており、そのうちの 3 節に貯水池 (tataka) を造ったということが記され、その他に川の側の土地を手に入れたという記述も確認できる。これらの事業が碑文に記されていることから、当時はこのような水に関する事業が一族の名誉であったと考えられる。

12 - 13 世紀の KVS を出典とする観世音菩薩像は「ヒンドゥーの諸神を出現する」とされているが、12 世紀前半はアンコール・ワットに代表されるようにヒンドゥー教の勢力が強く、このことが KVS 第 1 部第 4 章を選択した理由として考えられる⁴⁾。また、12 - 13 世紀はアンコールが最大版図を有した時代であり、筆者の調査によれば同観世音菩薩像はシムリアプを中心に、プラサート・ムアン・シン (タイ西部) やプレア・カン (コンボン・スヴァイ) など地方の大寺院に奉納される傾向がある⁴⁾。このことから、12 - 13 世紀において観世音菩薩像は、地方と中央を結ぶ紐帯であり、また多様性に

富んだ社会を内包する役割があったと考えられる。

一方左右第 1 手与願印を示す観世音菩薩像は、カンボジア北西部からしか確認されておらず、王権を支える紐帯とはなりえなかったといえる。また、10 - 11 世紀の表現では、ヒンドゥーの諸神との混淆には重点を置かず、むしろ水で満たされるという側面を重要視している^{*10}。一方、12 - 13 世紀の観世音菩薩像では、水で満たされるということよりもヒンドゥーとの融和に要点が置かれていると考えられる。10 - 11 世紀の「水重視」の表現では、12 世紀前半のヒンドゥー教の隆盛期を生き延びられなかったともいえ、この時代が KVS の重要視される個所が転換される分岐点であったと考えることも可能であろう。

おわりに

従来のクメール美術史やアンコールの宗教は、王都であったシムリアプの遺跡を中心に語られており、王都でみられる仏教や美術の影響の源を国内の一地方に求めることは主流でなかった。しかしながら、バイヨン寺院に代表されるジャヤヴァルマン 7 世期の大乗仏教の隆盛は、遡れば 10 - 11 世紀の、プノン・スロックなどのこれまで扱われてこなかった地方拠点が重要であったことが判明した。アンコールが最大版図を築く上で、東北タイやカンボジア北西部が重要視されていた地域であったと考えられる。今後は、KVS を出典とする観世音菩薩像の出現する時代の連続性、王家の系譜、また現在のタイに位置する遺跡や彫像との関連、河川などの水系ネットワークも視野に入れながら研究を進めていきたい。

※図のキャプション中、NMPP はプノンペン国立博物館、MG はギメ国立東洋美術館をあらわす。また、碑文の SK はサンスクリット語、KH は古クメール語を指す。

※ UNESCO-DCA は、アンコール保存事務所に所蔵されている彫像を中心にユネスコとフランス極東学院が 2004 年に作成した調書で、“DCA”は Dépôt de la Conservation d'Angkor (アンコール保存事務所) の略。現在はフランス極東学院にて閲覧できる。

*9 タイの北東部、カンボジアとの国境近くに位置する 11 世紀の寺院。同碑文は現在バンコク国立博物館に所蔵されている。A,B,C,D の計 4 面からなる碑文で、それぞれ、A 面:60 行 (SK)、B 面:77 行 (SK)、C 面:55 行 (SK) + 29 行 (KH)、D 面 2 行 (SK) + 117 行 (KH) から成る。シヴァへの賛辞から始まり、サダーシヴァという人物やその親族について、また彼らの功績や行われた事業に関して記されている。

*10 もっともこれは、10 世紀に混淆がなかったという意味ではなく、混淆よりむしろ「水」に関する信仰が強調されたということである。

謝 辞

本研究は、公益財団法人三島海雲記念財団平成 22 年度「学術研究奨励金」によって遂行された研究の成果の一部である。

参 考 文 献

- 1) 塚本啓祥他編：梵語仏典の研究Ⅳ 密教経典篇、平楽寺書店、1989.
- 2) Mette, Adelheid : Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha, Indica et Tibetica Verlag, 1997.
- 3) Vaidya, Paraśurāma Lakshmaṇa : *Mahayana-sutra-samgraha*, Part I, pp.258–308, Mithila Institute, 1961.
- 4) 宮崎晶子：東南アジア考古学, 28, 75–85, 2008.
- 5) Woodward, H. W. : *Buddhist Art: Form and Meaning*, (Pal, Pratapaditya ed.), pp.71-83, Marg Publications, 2007.
- 6) Skilling, Peter : *Aseanie*, 11, pp.13–20, 2003.
- 7) Pou, Saveros : Nouvelles inscriptions du Cambodge, II&III, p.129, École française d'Extreme-Orient, 2001.
- 8) Studholme, Alexander : The origins of omṃ maṇipadme hūṃ: a

study of the Kāraṇḍavyūha sūtra, p.123, State University of New York, 2002.

9) Finot, Louis : *Études asiatiques, publiées à l'occasion du vingt-cinquième anniversaire de l'École française d'Extreme-Orient par ses membres et ses collaborateurs*, pp.227–256, G. van Oest, 1925.

10) Cœdès, George et Pierre Dupont : *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 43, 56–154, 1943–1946.

11) Bhattacharyya, Benoytosh : The Indian Buddhist iconography mainly based on the Sādhnamālā and other cognate Tantric texts of rituals, pp.141–142, Firma K.L. Mukhopadhyay, 1958.

12) 佐久間留理子：『中世インドの学際的研究』平成 14-16 年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書(研究代表者 前田専学)、pp. 200–215、2005.

13) Jessup, Helen. I. and Zephir, Thierry (ed.) : *Sculpture of Angkor and Ancient Cambodia. Millennium of Glory*, p.315, National Gallery of Art Washington, 1997.

14) Chutiwongs, Nandana : The iconography of Avalokiteśvara in mainland South East Asia, pl.121–122, Indira Gandhi National Centre for the Arts : Aryan Books International, 2002.